

未来を育む 願いを共に ～「あの日」の想いと記憶を、未来へ～

芦屋市の阪神・淡路大震災30年事業

芦屋市では震災犠牲者への哀悼の意を示し、安全への願いをいま一度ともにして、未来に向けた災害対応力をはぐくむための継続的な取り組みを推進するために「震災30年事業」を進めています。「震災30年事業」では、市の各部署や市民グループなどが、さまざまな活動を計画・実施しています。その取り組みの一部を紹介します。

市の取り組み

外国人と日本人と一緒に防災訓練

外国人向けの防災教室や避難所巡回訓練を行い、災害時に共に生き抜く力を養いました。

「救急の日」のイベント

心肺蘇生法やAEDの使い方の指導、応急手当実技説明などを行いました。また、震災時の映像や写真の展示を通じて防災の重要性を訴えました。災害時に救急車がすぐに来られない場合に備え、身近なものを使った救護方法も周知しました。



「救急の日」救護方法を学ぶ

市民グループ等による取り組み



防災食を作る取り組み

栄養バランスの良い防災食の普及

身近な食材を使い、栄養バランスを考え、火を使わずに防災食をつくる取り組みを実施。またチラシなどを使って紙食器も作成しました。



紙食器を作成

「1.17あしやフェニックス基金」による助成の拡充

市内のグループ等が行う防災活動等を支援するため、新たに、震災に関する資料の活用を図る活動や、災害への備えの点検・見直しの推進を図る活動等を助成対象に加えています。令和6年12月10日時点で、6件の助成金交付申請をいただきました。

未来世代による取り組みとの連携等

震災の経験と教訓を風化させることなく後世に継承していくため、震災を経験していない未来世代が主体となる震災関連の取り組みについて、情報交換や連携を図り、将来に向けた取り組みを

一緒に進めます。これまでも、震災に関連する取り組みを実施している甲南女子大学の学生との意見交換を行ったほか、追悼式では高校生によるメッセージの発信等を行います。

芦屋市阪神・淡路大震災30年事業特別企画

甲南女子大学×芦屋市 共同制作番組
あしやトライあんぐる「つなぐ・伝える」

阪神・淡路大震災から30年。震災を知らない世代も増えてきました。震災の教訓を次世代に伝えるため、防災や災害対応の有識者や災害を経験された方への取材を重ねて、その重要性を学び続ける甲南女子大学の学生達が、「つなぐ・伝える」をテーマに広報番組を制作しています。令和6年能登半島地震を受けて被災地・珠洲市を訪



芦屋市広報番組
YouTube

れ、現地での取材や地域住民とのふれあいを通じて、被災地の現状と向き合います。学びや経験を次の世代へつなぐ活動で得た新たな発見とは？震災を知り、「つなぐ・伝える」取り組みを紹介します。



1仮設住宅でのハンドトリートメント 2令和6年能登半島地震で倒壊した家屋
3障がい者福祉サービスの事業所の視察 4「つなぐ・伝える」活動報告会